

泰山府君

世阿弥作

前

ワキ

桜町中納言

シテ

天女

後

シテ

泰山府君

季は

地は

三月

京都

「是は桜町の中納言とは我事なり。わが好ける心に

あくがれて。青陽の春の朝には。花山に入つて日

を暮らし。秋は龍田の紅葉ばの。色に染み香にめ

でゝ。情を四方にめぐらせば。心に洩るゝ方もなし。

されども妙なる花盛。三春にだに足らずして。唯

一七日の間なり。余りに名残惜しく候へば。泰山

府君の祭を執り行ひ。花の命を延べばやと存じ候。

サシ 「有難や治まる御代の習ひとて。何か望みは荒磯海

の。浜の真砂の数々に。年を尽すや栄花の家。

地 「花の命を残さんと。く。是も手向と木綿花の。

白木綿懸けて緋桜の。影明らかに春の夜の。月の
光りも曇らじな。金銀珠玉色々の。花の祭を急ぐ
なり。く。

「花におり立つ白雲の。嵐や空に帰るらん。

サシ 「天つ風雲の通路吹きとぢよ。乙女の姿しばしだに。
とゞめかねたる春の夜の。色香上なき花盛。よそ

めの色も面白や。

地「いざ桜。われも散りなん一盛。く。誘ふ嵐も心して。松に残る薄雪の。盛とも夕暮の。月も落ちくる天の原。霞の衣来て見れば。妙なる花の気色かな。く。

シテ詞「あら面白の花盛や。何ともして一枝手折り天上へ帰らばやと思ひ候。花枝眼に入つて春あひ得ず。花一枝を手折らんと。忍びくに立ち寄れば。

ワキ「春夜一時値千金。花に清香月に陰。見る目ひまなき花守の。鼓を数へ待ち居たり。

シテ「折らばやの花一枝に人知れぬ。我通路の関守は。宵々ごとにうちも寐よ。

ワキ「寐られん物か下枕。花より外は夢もなし。

シテ「実にくく見れば木の本に。人を寄せじと花の垣。ワキ「隔てぬ月の影ともに。

シテ「花の光の。

ワキ
「照り添ひて。

地
「中々木陰はくらからねば。何と手折らん花心。月の夜桜の。影あさまなり恥かしや。

ロンギ地
「實に有難や此春の。く。花の祭の時過ぎば。今少しこそ松の風。終には花の跡とはん。

シテ
「今手折らずは一枝の。後の七日を松の風。雪になり行く花ならば。跡とふとても由なし。

地
「よしや吉野の山桜。千本の花の桜町。

シテ
「月も折しも春の夜の。

地
「霞の光。

シテ
「花の影。

地
「何か今宵の。思ひ出ならぬさりながら。あはれ一枝を。花の袖に手折りて。月をも共に詠めばやの。望みは残れり。此春の望み残れり。

シテ詞
「うれしやな月が入りて候ふさりながら。手折るべき便りなければ徒に。更くる夜の間を待ちつるに。

地

「うれしや月も入りたりや。く。今は上こそ花盛。
木の下闇に忍び寄り。さしも妙なる花の枝。手折
りて行くや乙女子が。天の羽衣立ち重ね。天つ空
にぞ帰りける。く。 (中入)

後ジテ
「そもそも是は。五道の冥官泰山府君なり。

詞
「我人間の定相を守り。明闇二つを守護する処に。
上古にも聞かざりし。花の命を延べん為め我を祭
る。唯色に染む一花心とは思へども。よくく思

へば道理々々。煙霞跡を埋んでは花の暮を惜しみ。

佐国まさに身を捨てゝ後の春を待たず。斯かるた
めしも有る花を。手折れる者は何者ぞと。通力を
以てよく見るに。欲界色界無色界。化天耶摩天に
てもなきが。らくへん下天の天人が。此花を折つ
たよ。

地
「山河草木震動して。虚空に光り満ち満てり。

シテ
「天上清しと見る所に。何ぞ偷盜の雲の上。

地 「天つ乙女の羽衣の。花のかづらの春を待て。

シテ 「待たじはや待たじはや。

地 「花一時の栄花の桜。

シテ 「かざしの花のたまくなるに。

地 「花実の種も中空の。天つ御空は雲晴れて。らく
へん下天は顯はれたり。天女はふたゝび天降り。
く。さしも心に懸けし花の。かづらもしぼむ
涙の雨より。散りくる花を慕ひ行けば。

シテ 「天上にてこそ栄花の桜。

地 「散り来て何か残りの雪の。消えばや花も命の定め。

梵釈十王閻魔宮。五道の冥官泰山府君の。力を種
の継木の桜。あつぱれ奇特の花盛。

シテ 「通力自在の遍満なれば。花の命は七日なれども。

地 「通力自在の遍満なれば。花の命は七日なれども。
もとより鬼神に横道あらんや。花の梢に飛び翔つ
て。嵐を防ぎ雨を漏らさず。四方にふさがる花の

命。七日に限る桜の盛。三七日まで残りけり。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第三輯」大和田建樹著